

37、墨梅水仙図扁額 野口小蘋

慶応元年（一八六五） 二一・四×三四・〇cm 紙本墨画淡彩 個人蔵

野口小蘋は、慶応年間（一八六五〜六八）頃より、たびたび八幡を訪れている。その理由は、絵を売って家族の生計を立てるためと言われている。同じ頃、日根対山に師事し、画業の研鑽に励むと共に、谷鉄臣、巖谷一六らと交流を持ったとある。この作品は、小蘋の若かりし頃に描かれたものである。「玉山女史」と落款があり、「玉山」と号した時代の稀少な作品であり、小蘋と名乗る以前のものとして興味深い。墨で梅と水仙を描いたシンプルな構図で、僅かに水仙の花びらと葉に色を付けている。なお、野口小蘋が「小蘋」と名乗った時期については対山に師事した慶応元年（一八六五）、十九歳の頃と考えられているが、判然とはしない。ただし、木戸孝允の日記に「女子小蘋」（明治元年六月九日条）とあるので、この頃には確実に名乗っていたと考えられる。



「玉」[山]（連珠印）
各0.9×0.9cm

【釈文】

乙丑冬日
玉山女史写



38、松下清風図 野口小蘋

慶応二年（一八六六） 一一六・八×三六・二cm 紙本墨画 個人蔵

墨一色で松の大樹、建物に人物、聳える山を描いた作品である。この頃は、対山に師事していた時期であり、丁寧に描こうとする実直さが、作品から伝わってくる。元来、いわれているように、前年の慶応元年（一八六七）に「小蘋」と名乗るのであれば、この作品にあえて「玉山」と書く理由が分からない。但し、小蘋自身が使い分けていることも想定できる。いずれにしても、玉山を用いる時代の優品といえよう。



【釈文】
松下清風
丙寅夏五 玉山女史写



「松千賀印」
2.2×2.2cm



「玉山女史」
2.2×2.2cm